私達が立っている場所

――一九九七年七月、「トルソーの時代」を読む――

小山秀樹

一　気にかかって来たこと、あるいは彼らはどこに立っているか。――一九九七年四月――

私は一九九六年度に入学した四十一期生に、現代文の授業担当者として、担任として関わって来た。彼らが一年であった昨年度は、彼らが次々と起こす様々な事件の処理に追われながら、「彼らはいったいこの学校で何をどうしたいのだ？」ということを考え続けざるを得なかったように思う。勉強に取り組まないことはない。ＨＲでは話し合いを持とうとはする。しかし、何か違うのだ。入学後すぐに行なわれた合宿での討論は中学時代のディベートの延長にしか過ぎず、彼らの考えは見えて来なかった。盗難とカンニングが常時課題となっていた彼ら。私は彼らの持つ問題をなんとか表わしてみようと言葉を探した。「教師や友人を十分信頼できない人達。」何か違う。

自然と私の現代文の授業は、彼らが自分自身を見つめていけるような、そんな教材を中心に進めていくようになった。まず「言葉の力」（大岡信）で、自分達が日常使っている言葉に目を向けさせようとした。入学当初の彼らのＨＲや合宿での討論は、真っ先にその教材をしなければならないと私に思わせた程、虚しかったのである。続いて「見る――考える」（大森荘蔵）「掟」（カフカ）と進み、彼らの関心がどこにあるのかを見ようとした。そして「現代における態度決定」（丸山真男）「手作り幻想」（川田順造）「羅生門」（芥川龍之介）で、彼ら自身と現代という時代を重ねあわせていこうとした。今から振り返ってみると多少の無理もあったように思うのだが、その時の私は結構気負って思い詰めていて、以上のような教材を展開していたわけである。

授業を進めていくうちに、私は彼らの持つ問題を言葉に表わすとこうなるのではないかと少しずつ思うようになった。それは突き詰めて言うと、「彼らには場がない。」というようなことである。（こんなふうに文字にしてしまうとまた違うという気にもなってくるのだが。）彼らには学校があり、ＨＲがある。そこには教師がいて、友人もいる。

しかし、場がない。親しい友人との楽しい会話を場としてしまうのはあまりに小さく、弱く、彼らは自分自身が立っている場所の危うさを感じながら毎日を過ごしているのである。

この時、「彼ら」とひとくくりにできる状況とは以下のようなものである。

① 小学校から中学校、中学校から高校と進学のたびに彼らの心は傷ついて来た。

② 学力差が著しく物事に対する考え方が多様な彼らは、HR集団として活動していくことを高校入学以前のある時期にあきらめた。

③ 重なる盗難やカンニングが②をより決定的なものにしつつあり、その必然として生じたHR内の小集団は互いに争ったり牽制しあったり無関心であったりしている。

一九九七年四月、彼らは二年になった。私は現代文の授業で、彼らに自分達の問題を腑に落ちるようなかたちで見つめさせたいと思った。そして、展望も一緒に考えていきたいと思った。もちろん、大げさなことをまたもや……と思いなおさなかったわけではない。しかし私が考察した①から③までの状況が彼らに固有の状況でありながら彼らの持つ「場がない。」という問題は彼ら固有の問題でないことは私の心を動かすには十分だった。それは私の、私達の問題である。固有な状況をかかえた人達が固有でない問題にあたる。それは現代の問題である。私は、私の担当する二年の現代文の授業がそのことと無関係に進んでいけるとはどうしても思えなかったのである。

二　附高祭という場――一九九七年六月――

本校には附高祭という自治会行事がある。前期自治会執行部が中心となって原案を作り、学級代表で構成される代表委員会が実施を決議する。その後、運営委員が実際的な運営を行なう。三日半の日程は演劇企画やデコレーション企画など多くの企画で埋まっていくのだが、本年度の附高祭原案の前文は例年とは違ったタイプの文章だった。（資料①）

優等生の作文だという意見もあった。しかし私にはこの文章は、彼らが自分達の日常を何とか変えたいと不器用な言葉の使い方をしながら全生徒に訴えているように感じられた。生徒全員が関わる行事を作っていくことによって自分たちを癒し、自分達の場を再生させていこうとすること。私達も何とかその試みを応援しなければなるまい。しかし、場を再生していこうとすることを、場が成立しにくいところで進めていくことなど果たしてできるのだろうか。できるだけ多くの生徒をその気にさせ、巻き込んで準備していかなければならない。執行部は、本当に困難な課題を背負ってしまったわけである。（資料②）

三　「トルソーの時代」を読む。――一九九七年六月――

附高祭の審議が中盤にさしかかった頃、授業では「トルソーの時代」をあつかい始めた。私としてはこの教材は、附高祭に対するささやかなアシストのつもりだったのである。一九八七年に書かれた加藤典洋のこの文章は、現代の私達がどの地点にいるのか、どんなところまで来てしまっているのかを考えさせる。「内面」と「身体」が一体となっていた時代から両者が別々に引き裂かれた存在として両者を生きる時代へと変化した今、私達にはどう過ごすことが可能なのか。「内面」と「身体」は、「理念」と「生活感覚」とも、「執行部」と「クラスの生徒」とも読みかえることができるだろう。私が何とか言葉に表わそうとしてきた問題に重ねて言えば、現代において引き裂かれた「内面」と「身体」に場は可能か？というようなことでもある。そして何よりもこの文章は、現在毎日を過ごしている生徒達自身を少しの間立ち止まらせる契機となるようにも思う。私は毎時間「トルソーの時代」の語句や一文を取りあげ、生徒の意見を聞きながらゆっくりと読んでいった。

四　「トルソーの時代」の附高祭という場――一九九七年七月――

現代文の授業で「トルソーの時代」を読むことを附高祭の審議と重ねたため、生徒たちは比較的容易に教材に自分達を見たようである。生徒達の文章をいくつか見ていこう。（資料③④⑤）

資料③④を書いたのは、自治会執行部役員と附高祭有志である。彼らは附高祭を附高の民主主義にのっとりながら進めていこうとするのだが、みんなの心をつかむことができずに苛立ち、失望もしている。実際、代表委員会や運営委員会は流会が続き、附高祭の実施は危ぶまれ出したのである。附高祭原案は可決はしたが、その後の議会で流会が続くという実態。もちろん、附高祭をやりたくないという生徒達も相当数いるわけである。（資料⑥）このありようについてはS君が優れた分析をしている。（資料⑤）

進んでしまった時代のせいにして自らの理念を温存させるのはたやすいが、それを容易にさせない程附高祭を進めていた生徒たちは傷ついた。しかし附高祭に反対していた生徒達もこの時代の過ごし方として考えを持ちながら反対していた。そしておそらく無関心を装い、委員会を欠席していた人達もまた他に取っていける態度がなく、やむをえない態度の取り方としてそうしていたに違いない。私には彼らの附高祭をめぐる一連の議論は、違った言語や文法を持つ人達どうしのやりとりのようにも見え、場のないところで何とか議論をすることによって場を作り出そうとするあてのない一人一人の孤独な試みのようにも見えた。

五　「地つづき」の問題と私達が立っている場所（展望にかえて）

今年度、附高祭は実施されないことになった。自治会にとって、学校にとって、初めての出来事である。そしてそのことは、私が四十一期生に対して感じた問題が、少なくともこの学校の生徒達に対して感じなければならない問題であるということを示している。いや、それより前に私は今回の附高祭にどう関わったか。クラスでの私の発言や役員や委員への助言、演じられることのなかったクラス演劇「巨人の星――熱血附高編――」の脚本参加、それらは彼らにどんな意味を持ち得たというのか。問題は依然としてそのままで、私達は必ず敗けにつながる道をずるずると進んで来たという気さえする。

しかし進んで来たことによって、新しい発見はあった。それは、授業についてである。私と生徒達は授業中、「トルソーの時代」を語りながら附高祭を、附高の現在を語っていた。あるいは附高祭を準備しながら自然と「トルソーの時代」についての議論になった。授業と日常の境界の意識は、この時ほとんどなかったように思う。今回研究協議として提案するにあたってこのような形式で書きつらねたのは、授業、日常と分けることができないかたちで過ごしてきたそのままをそのかたちをとどめたまま書いていきたいと考えたからである。現代文の授業は、自分達の日常と授業での学習が「地つづき」になったときにその意味を持つように思う。私達の問題は現代の問題のあらわれの一つとして依然としてあるままである。しかし私達は、授業を通して私達の問題にともに向きあうことだけは必ずできるのである。

生徒達の関心は様々で、うつろいやすく、議論の場も成立しにくい。そんな状況にさらされながら私達が少しでも場をつくっていく可能性があるとすれば、ともに自分達が立っている場所を確かめながら相手の言葉を自分達の方向を示してくれる新鮮な断片として静かに聞き、とらえなおしていくことの重なりの中にしかないように現在の私には思える。（資料⑦⑧⑨）

（大阪教育大学教育学部附属高等学校天王寺校舎）

資料①

前文

私達附高生は、一人一人が、自治会という集団の一員です。そして、附高生全員の自由な意志を互いに最大限に尊重しあうために、集団の中において、自分自身の行動について、周りの人間に対して責任を負わなければなりません。

けれども、私達附高生は自由の意味を履き違えてはいないでしょうか。自分勝手な行動と、責任を伴う自由な行動とは違うのです。

この違いを認識出来ていないために、クラスの各委員をじゃんけんやくじで決めたり、配られた代表委員会報告を読まない、といった現状もあります。そして、このような現状は打ち破る必要があります。

そのために私達附高生に今必要なのは、集団としての方向性に自分の考えを反映させ、その結果、集団が一体となって動いていくことの出来る場です。そして、自分の行動が集団に与えた影響について考え、それによって責任を伴う自由について認識できる場です。

そして、このような場として提案するのが、附高祭です。

附高祭において、私達附高生一人一人の意見が、クラスを基本とする学校内の集団としての方向性に具体的に関わります。その結果集団が行動することにより、自分自身の自由な行動が周りの人間にどう影響を与えたかを考え、それによって責任を伴う自由について認識することが出来ます。そして、私達附高生は、一人一人が自治会という集団の一員であることをも認識する事が出来ます。

資料②

・附高祭は本当にできるのか？・もう、「この日までには原案を可決させる」という日はとっくにすぎています。いつ可決してもいいはずです。原因は、有志が少なく執行部が忙しい原案をつくっていること、代表委員会の遅れ（学年案審議・決定・次席者が多い）などではないでしょうか。この遅れを少しでも回復するには、代表委員会のスムーズな審議と、可決後の各企画の運営にかかっています。

資料③

現代に生きる私達は頭部と身体が別々、すなわち考えることと実際にとる行動とは別で、お互い独立している。これは、一人一人がそうだというだけではなく、社会全体のしくみがそうだといえる。例えば、この附高には自治会という組織がある。私の考えていた理想の自治会とは、生徒一人一人がその活動に関心をもち、活発な意見もでてその方向性を自分達で作っていけるもの、一人一人が積極的にその活動に関わっている（委員になるなど）ものであった。

けれども、それはこの本文に即していうなら、身体を欠いた頭部でしかない。現在の附高生一人一人にとって自治会が自分の生きる社会の全てではないからである。身体と頭部が独立しているということは頭部だけで考え、身体だけで生きることができるのだから附高生一人一人にとっても頭部で考える自治会があれば、身体だけで生きる他の社会もある。だから、現在私が自治会をよりよいものにかえていこうと思うからといって、その方法として頭で考えている理想の自治会の考えを、行動の伴うものにかえていこうとしてもそれは、すでにお互い分裂してしまっている二つのもの（頭部・身体）をむりやりつなげようとしているだけであって、結局それは身体を欠いた頭部の思考であり、現状の解決にはならない。そうではなくて、今は社会が分化していて、人それぞれいくつもの社会と関わりをもっていることを認識したうえで、自治会も見つつ、また他の社会とも関わるというような、身体を欠いた頭部、頭部を欠いた身体の両方があることを事実としてとらえた上で自治会のことも考えていくべきだと思った。

（A組　男）

資料④

今の附高と重ねてみると、鉄腕アトムは理想的附高生の姿なんです。それで鉄人28号になるとどうなるか。理想（精神）と生活感がズレてくる。というか、ここではっきり「理想」という言葉が別の意味をもって浮かび上がってくるのです。〝現実は完全には無理だけど、目指さなくちゃいけない目標〟として理論上非のうちどころのない美しすぎるものだけがポンととびでてしまうのです。そしてそれはますます分離をはじめます。学生闘争なんかも、理想は実にすばらしいのに行動は暴動によってでしかできない。精神が良すぎて、飛躍してしまってるんですね。精神が素直に身体へと、行動へとむすびつかず、曲がりくねってたどりつくから妙なことになるんです。それで日本人は疲れてしまった。精神と体をむすびつけておくことが難しいならいっそひきはがしてしまえばいい。そして理想や感情はますます空をとび、身体たちはわけもなく動きつづけている。したがって何をしても満足感ということはなく高い理想を抱いてもこれは空振りにしかなりません。たとえ附高祭有志が熱い思いをみんなにぶつけても、心ここにあらずの身体たち（この人たちは実に現実的で冷たい）にはそれを受けとめるもの（精神）がないんですから、素通りしてしまう。実は心の底の方には『そういうのもいいなあ』という思いがあるのに、それは体と結びつけるにはすごくエネルギーがいって、なんとなくめんどうになってまた冷凍してしまう。有志も有志で、理想は外からの冷たい声にすっかりまいって有志もそれを冷凍して「心」を欠いた身体としてしゃにむに働くしかない。「身体」を欠いた原案をつくり、それを「心」を欠いた身体で実行することで、何が成功するものでしょう。実際、うまくいかない＋身体をムリにしようとするより、今しばらく現状を見つめどうすれば本当の「自治」になるのか、考える時間が「今」この時代だ、そう思いました。

（B組　女）

資料⑤

自治会問題に即して論述してみよう。まず、現状は理念『自主と自立』の達成を意図して作られた様々な枠組みに慣例化、形骸化、空洞化などの問題が生じている。これは前例をふまえるという安逸をむさぼった結果なのか。一方、理念は、附高生の大部分の人に理解されている。その証拠に、附高生の真の姿

というものを架空の論として思考するのには皆長けている。しかし、その理解が故に失望と不満を抱えている。原因は、実際に行動などを例にとっても、その企画や運営の能力・権利が一部の層にしか持ちえないこと、代表委や各種委の審議内容の不透明さ・質の低下等に求められよう。結果的に大部分の附高生は次のような状況を呈する。理念を理解しながら一方で、その理念は現実では達成されないという失望を抱いている。結果、そのような達成されない理念を前提して生活することは、現実にはできなくなった。他方理念を思考するときも、それが達成されぬという現実を唯一の根拠とすることでしか発言、思考できない。これが頭部と身体の分裂、マジンガーZの時代なのだ。一方、少数である企画者側（役員・執行部）の方も、理念を理解し、また現状とのズレを認めている。しかしあくまで、その理念の達成に固執した理念の一方的支配を続けている、いわば鉄人28号の世界。附高生は誰もが企画者になれるという点でこの世界を行き来することになる。

さて、私達が今すべきことはなにか？その前にこんな例を引いて考えてみよう。新しい理念の誕生はどのようなものか。絶対主義から資本主義へと歴史は移行してきた。言いかえれば資本主義理念の誕生といってもいい。当時、絶対主義は数百年を経て、経済システムの変革などにより権力バランスが崩壊し、理念と現実に大きな矛盾を生じていた。そこですぐに資本主義が登場したのではない。人々は、現状に問題となっていることが、そもそもどういう点で悪なのかということを理念の実現ということと照らし合わすことなく考えに考えた。問題そのものの〝本質的〟悪を追求するその一方、理念についても、現状の問題と分離させ（ここに痛みが生じる）、理念の真の意味とは何かを模索し続けた。これは実に困難なことである。現実にある多くの矛盾の中に身を置き、あくまでも、他との比較でない唯一の〝本質〟そのものを、あくまでとらえようとする戦い、これに痛みの生じないはずはない。しかし、その痛みを究極にまで昇華していくことではじめて、さらにすばらしい理念が生まれてくるのである。思えば、人類の社会の発展、経済の発展は、幾多のこうした〝生みの苦しみ〟を経験し、成立してきた。資本主義然り、民主主義然り…

話を元へ戻そう。今、私達にできることを先述の論に置きかえて考えると私達は、現実に今何が問題となっているかを洗い出す必要がある。一つ僕が例をあげると、附高生の〝個の喪失〟という問題。これが本質的にどういった悪で高校生として人間としての生活にいかなる悪であるかを追求していく必要は大いにある。他方、理念についても、それが真に意味すること〝自主とは何か〟〝自立（律）とは何か〟を現実の附高生の姿と比較して考えるのではなく、本質をつきとめていく。そして、その理念と、産み出された数々の枠組み、例えば行事一つを考えても、その理念の達成には、何が必要なのかを考えていくべきだ。私達はこの矛盾した現実の中を理念を前提することなしに（或いはできず）生きなければならない。しかし、その中で〝本質〟を追求していく戦い、これから目をそむけることもまた許されない。本質を完全に、究極に、考えていくことは、附高生として、そして、この現代に生きる私達に課せられた最大の責務なのである。

（C組　男）

資料⑥

しっかりとした教育を受け、色々な物事を体験できる世の中で、私達の視野は広がり、やりたい事の範囲は大きくなった。しかし、結局、社会との様々なつながりが、行動範囲を狭くしている。私達は、家や学校などの社会の中に存在し、そこでたくさんのことをしてもらい、学ぶが、後々、何らかの形でこの社会の役に立ち、そのお返しをする契約を結んでいると思う。だから、その中から外れた行動をとり逃げ出す、ということ（例えば、家の条件に我慢できずに家出し、一人暮らしをしようとすることなど）をするとたちまちその社会全体から邪魔され、まず安全な道の保障がなくなり、自分の理想どおりに生きることなどできなくなると思う。そこで私は心の中で考えるこ

と、身体が行動しなければならないものの間を別々のものに切りはなして暮らしていたが、ずっとそのままでは苦しいので、心の形を行動の枠の中に押しこめ変形させることにしました。

（C組　女）

資料⑦

私達は今、マジンガーZに例えられるような頭部と身体とが分離してしまった時代の中で生活している。頭部と身体を切り離して生活しないと、私達の心は日々の刺激を受け心のままでとどまることができなくなる。だから、私達は考えるということはできるのだが、それは頭部だけのことであって、身体に命令を下すこともできず、頭部と切り離されて現代の流れに順応してしまった身体はその流れに従って行動を起こしてしまう。例えば、自分は今、普通に高校に通ってはいるが、それは本当に自分が考えたことだろうか。確かにこの高校に入ろうと決めたのは自分であるが、高校に入るというのはこの現代の流れというか、常識によって自分の意志ではないのではないか。現代では高校も出ないと普通じゃない、いい職につけないという考えが一般的で、この一般的な考えに自分は動かされたのかもしれないとこの文章を読んで思えてきた。

そして、この「かもしれない」というのが重要で、この例から考えても私達（僕だけかもしれないが）、頭部と身体の部分がごく当然なもので意識されていないように感じる。そこで、頭部と身体の分離に気付いた人達は、まず決まりのように過去をふり返る。そして、鉄腕アトムで例えられる頭部と身体の一致の時代をもう一度よみがえらそうとするのが普通である。しかし、今を生きる我々にとって過去を眺めるだけならいいが、それをあこがれ復活させようとするのはどうかと思う。我々は常に前進すべきで過去に逆戻りすべきではなく、もし戻ったとしても、同じことが繰り返されるのは目に見えてあきらかだ。そして、筆者の意見と最後も同じで、僕ももうしばらく、頭部と身体が分離した時代を生きてみるべきではないかと思う。なぜなら、僕のようにこの文章を読まないと、頭部と身体が分離しているということに気付かない人がまだいるだろう。そして、その人が気づくのを待たなければ進歩はそう簡単には起こらないだろう。もし、そういう人がいなくても、この時代の中で、どう進歩できて、どう進歩すべきかをみんなでじっくり考えなければ、無理に時代を変えようとしても無駄だからである。

（B組　男）

資料⑧

頭部・即ち理念とは、本来現実に触れそこから現実を改善するために生まれてくるものだ。例えば戦時中の反省から戦後、民主主義になったように。しかし、現在では理念がまず最初にあり、それを純粋に保つために刺激に満ちた現実から切り離さなければならなくなっている。（身体＝生活感覚＝現実）即ち現実はここでは理念を汚し鈍らせるものとしてとらえられている。こうして理念は純粋に保つことができるが、理念によって現実を変えるというあるべき姿が見失われているため、それ以上の発展は望めない。

身体を欠いた頭部＝行き場のない理念。頭部を欠いた身体＝理念がないために生活の刺激の中に流されていくだけの姿。この結果、それぞれ皆が理念を持ち（他から教えられたものにしろ）、それが肥大していくのに現実はますます堕落していくということになる。そうなると、自分たちが実際に何もしていないのに気づかない人々は「理念は無力だ」という諦めをもつ。しかし、この状況を打破するために過去をモデル化するのは安易である。現実と理念を相関的なものにしようとしているのに、モデル化、理想化で飾りたてた過去を目指すのは現実を無視した行いであり、結局は単なる無力な理念と同様に失墜する。なすべきことは、現実を空虚なものにしてしまった責任を自覚し、肥大させた行き場のない理念を捨てることである。それが最初の「現実から見出した理念、理念によって改善した現実」の実行となる。

（B組　女）

資料⑨

我々が生きる上では毎日ずっと頭ばかり使って行動する人はいない。日常的な事はすべて体だけが動いて頭は働いていないのである。また頭で考えていることを行動に移した場合、その際に必ずといって良いほど、何らかの影響で、考えを100％実行することは不可能になっている。行動に移せばその考えはどんどんくずされていくであろうし、頭では、自分の思う内容を十分に練り込んだすばらしい方法があったとしても、それを中心にした自らの行動がとれなくなっているのが現代である。特に私は「～をしなければならない」と思うのだが、それに基づいて体を動かすのはほんの数％で、なぜしないのかと言われれば、私が「したい気が起こらない」からである。また、その本質をしっかり見抜いていないからである。現代では、考えを直に行動に移す人はごく少なくなってきている。デモなども少なくなってきている。特に私が思うのは昔の人々が頭部と身体を合わせてつくったもの、行事などが、その意味もよくわからずにとりあえずやっておこうという「今」を考えずに「昔」を思い出すだけのものとなってしまっている気がする。

それによって、これから先、やはりおかしな矛盾が生じてくるだろう。私達が生活する中で、絶対的に必要なものが見つかるはずである。その時に初めて人は、頭部と身体を合体させて、どうにかして手にいれようとするはずである。（B組　女）